

聖堂再生

目次

プロローグ

聖堂はみんなのもの

土田充義

2

ザビエル聖堂再建にあたって

郡山健次郎

10

一途の心に神の恵みが

永山幸弘

10

第1章 ザビエル聖堂の足跡

昭和二十四年、鹿児島

14

写真で見る聖堂の歴史

26

第2章 解体から九年間の歩み

再生へ

42

新聞記事から

48

解体の記憶

58

往復書簡から

62

第3章 文化財としてのザビエル聖堂

文化財の保存と再生とは

70

ザビエル聖堂の文化財的価値

74

図面と意匠

84

第4章 再生へ向けて

次世代への開かれたプロジェクト

96

現在の宗像

98

宗像にザビエル聖堂を迎える

鈴木忠一

102

エピローグ

104

資料

鹿児島市・ザビエルゆかりの地マップ

106

「福岡黙想の家」周辺マップ

107

カトリック教会・キリシタン用語解説

108

参考文献・参考資料など

110

お問い合わせ先

111

「ラム」——再生への思い

ひっくり返った価値観

中堀ちづ

24

水がしたたるような生木を削って

桃園淳一郎

24

自転車や古着を建設資金に

鬼木久美

25

七田神父とザビエル教会

小川靖忠

25

いても立ってもいられませんでした

古木和三

57

鹿児島と福岡の架け橋に

森 忠親

57

聖堂再生への思い

趙 紅閨

68

ザビエル教会を想う

美島春雄

94

プロローグ

「あそこで何をしていらっしゃるのですか？」

「ああ、窓を修理してるんですよ」

十一月も終わりに近いその日、山間地に近い「福岡黙想の家」では身が切れそうな寒風が吹いており、十分と立ってられないほどだった。そんな中、土田充義氏と私がプレハブの事務所では話をしている間、外で地面に座り込んで黙々と作業を続けている人がいた。背中を見せて作業をし続けるその人が手元で何をしているのかずっと気になつていた私は、作業を見せて欲しいとお願ひし、外へ出た。

古い木枠の窓。その窓の棧に黒くこびりついた埃の塊を、金ブラシで丁寧によそげ落としているのだった。ところが、埃だと思ったその黒い塊は、桜島の噴火による灰だという。長年にわたって少しづつたまり、固まって、石のようになっていられるらしい。足元から力が抜けるようだった。「そんな気が遠くなるような作業を……。本気？」

鹿児島の古い聖堂を解体し、遠く福岡県の宗像まで部材を運び、そ

こで復元しようとしている人がいる。知人から聞いたその話に興味を持ち現場を訪ねた私は、小屋いっぱいに積み上げられた木材、窓や石柱などの部材、数千枚の瓦などに圧倒された。本当にこれを元の聖堂に復元することなどできるのだろうか？ しかも部材は傷みが激しく、修理も大変だという。しかし、目の前では実際に、窓枠の灰の塊を削り続けている人がいる。

世はホリエモン逮捕の少し前、IT長者がもてはやされている絶頂期だった。その一方で、こんな地方のひと隅でこんな気の遠くなるようなことに取り組んでいる人もいるという事実、軽いショックを覚え、ひきつけられもした。しかも土田氏は、退職金まですべて注ぎ込んでいるらしい。

「先生、まだ正式にここで建てられるとは決まっていなとお聞きしています……」

「ああ、その時はまた、どこかに運びますよ」と、ニコニコ笑ってこともなげに答える。土田氏はいつも、柔らかな声で「ああ」と最初につけるようだ。不思議なことに、こちらもどうにかなるような気がしてくる。

三年前に鹿児島大学を定年で退いた土田氏は、この聖堂の再生に残りの人生をかけるという。このプロジェクトを通して、文化財修復専

門建築家としての想いを様々な形で実現したいという。二〇〇七（平成十九）年に着工が決まっている聖堂再生プロジェクトでは、かつてない、そして他にはない、参加型の新しい試みを盛り込んでいく考えだ。完成した聖堂を、指定文化財とすることを目指している。詳しくは第四章に述べるが、四年間の建築現場は、建築を志す人、文化財修復技術を学びたい人、キリスト教に関係する人、地域おこしに関わる人、いろいろな立場の人たちが関わる場となるだろう。

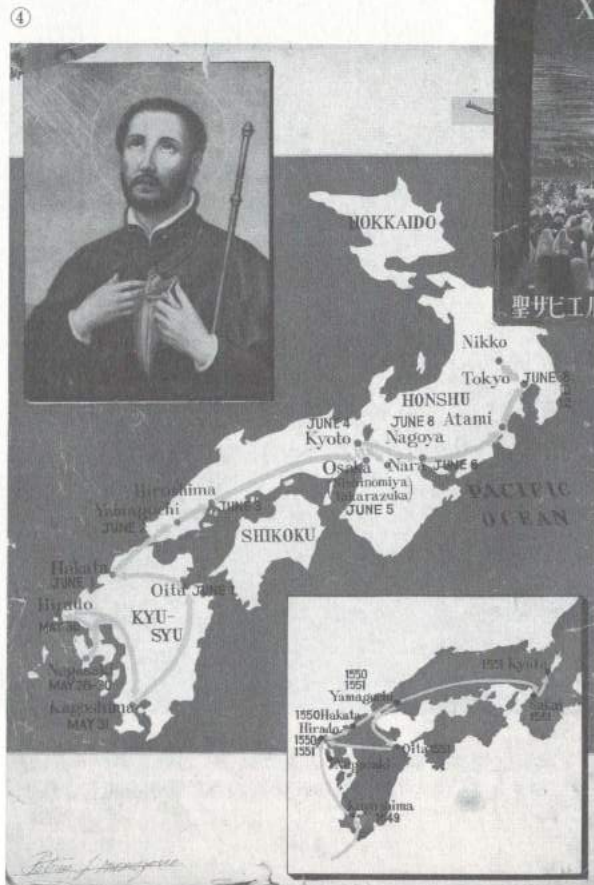
鹿兒島は、一五四九（天文十八）年にフランシスコ・ザビエルが上陸し、日本におけるキリスト教布教の一步をしるした地。今、宗像に部材として積まれている聖堂は、その鹿兒島でカトリック教会の中心であり続けたザビエル教会の二代目の聖堂である。この聖堂がどういう歴史を背負って今ここに再生されようとしており、一人ひとりが四年間の建築期間をどう活用できるのか。少しでもヒントになればと、過去の経緯や記録、建築物としての魅力などを一冊にまとめた。プロジェクトに参加する際の参考資料のつもりである。

建築、文化財関係の専門的な部分は、土田氏に解説していただいた。過去に他で掲載された論文なども引用している。文中に出てくるキリスト教の用語については、巻末に簡単な説明をつけたのでご覧いただきたい。

また、文中や新聞記事、年表に、建築についての交渉が白紙撤回されたことなど、後ろ向きであるような記述があるかもしれない。しかし、どの時点でも関わった人は前向きに誠実に考え、それでも様々な事情からだった経緯だということを申し添えておく。その紆余曲折をも記すことで、より現実味を帯びた参考記録となると思い掲載させていただいた。

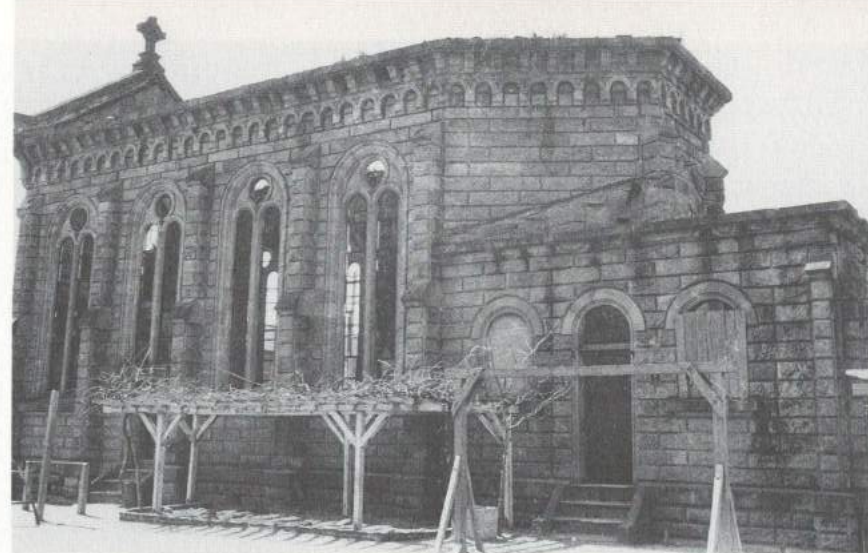
二〇〇七年の春、聖堂再生プロジェクトはスタートする。文化財として再生させるプロジェクトに関われるという、もしかしたらめったにお目にかかれないチャンス逃さないように、少しでも興味を持っていたできれば幸いである。そして、それぞれができることを提供しつつ、参加した人もそこから何かを得て、新しく物語が創られていくことを楽しみたいと思う。

松山ちあき



聖ザビエル渡来四百周年記念

「聖ザビエル渡来四百年記念巡礼」(朝日新聞社、1949年)の表紙(③)とウラ表紙(④)。ウラ表紙には、ザビエルが実際にたどった道と400年祭の巡礼団がたどる道が並べられている(以下21ページまで、すべて同冊子から)



①

②



- ① 焼け落ちた石造りの聖堂。外壁だけが残った
- ② ザビエル渡来400年祭に向け、連日建設作業に集まった若者たち

本土上陸の最前線だった鹿児島

るため米軍が九州の航空基地への攻撃を展開した一九四五年の春、B 29 ののべ機数も作戦回数も、半数近くが鹿児島島に向けたものだった。

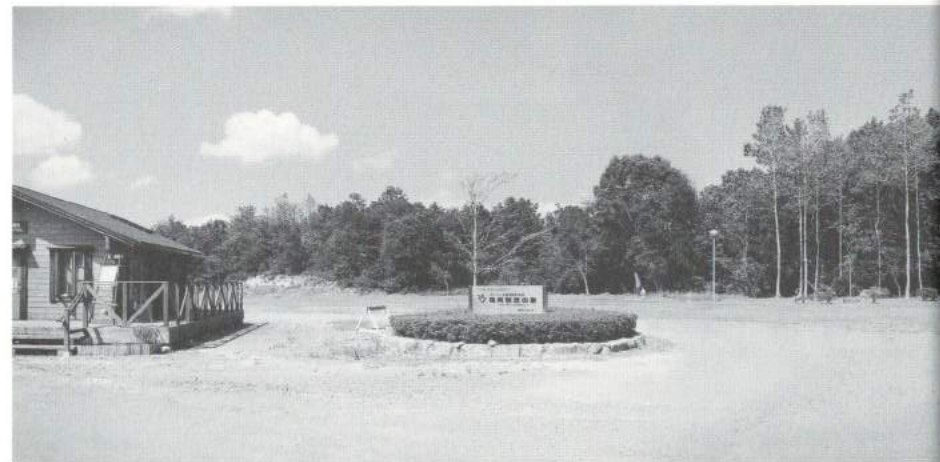
南九州は沖縄に続く戦場となる可能性が高かった。実際、連合国軍が立てた日本進攻作戦は、①沖縄進攻(アリスバーク作戦)、②南九州進攻(オリンピック作戦)、③関東進攻(コロンネット作戦)と、じわじわ首都圏に迫るものだった。南九州進攻は一九四五年十一月一日決行と決まっており、志布志湾岸、吹上浜、宮崎海岸の三カ所から

の同時上陸が計画されていた。日本側も、十五万あるいは二十万人と推測される兵力を配備、さらに国民義勇戦闘隊も組織された。

当時、鹿児島はそういう場所だった。徹底的に攻撃され、焼け尽くされた。そんな地で、終戦直後からザビエル聖堂の建築が急ピッチで進められたのは、理由があった。

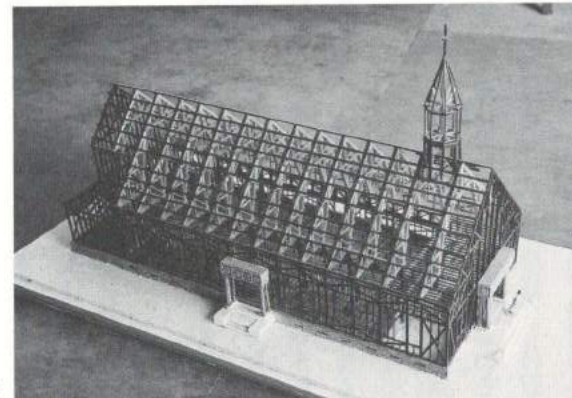
終戦後四年目の「ザビエル渡来四百年祭」

終戦から四年後の一九四九年、二代目のザビエル聖堂は完成し、ザビエル渡来四百年記念の大イベントを迎えた。鹿児島にフランチスコ・ザビエルが上陸し



- ①「福岡黙想の家」正門。右手へ進むと丘一帯に修道院などが広がる。左手駐車場奥にザビエル聖堂が再生される
- ②ザビエル聖堂の50分の1模型
- ③窓の修理中。腐食した部分を新しい板につけ替えながら、板の角度で議論白熱
- ④⑤漆喰の部材などを展示。今回は見本として使用する。もはや再現不能と思われる匠の技

①



②

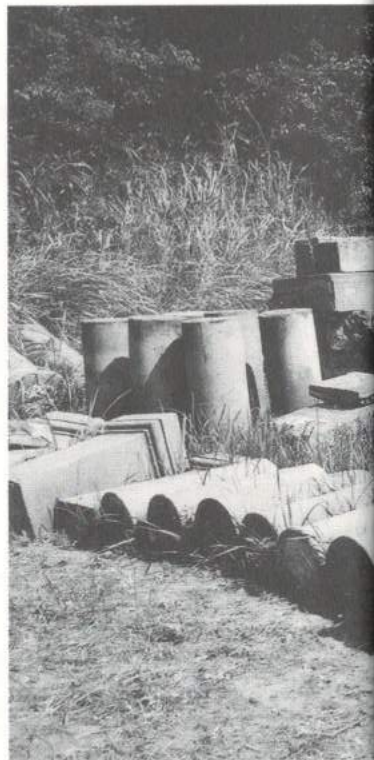
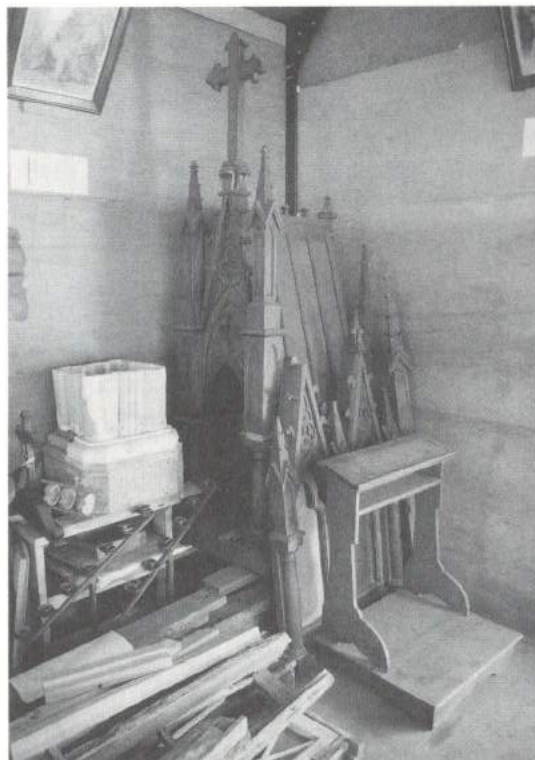


③

2

現在の宗像

福岡県宗像市の「福岡黙想の家」。
解体されたザビエル聖堂の部材はここに集められ、
二〇〇七年四月の着工を待っている。



司祭の椅子、祭壇、窓枠、石材など、貴重な部材が保管され、多くの人の手によって少しずつ修復が進んでいる。間伐材で囲炉裏や茶室も作って楽しんでいる

